

1980

義太夫

義太夫協会々報
第20号

昭和55年1月18日
社団法人 義太夫協会発行
〒104 東京都中央区銀座
8-14-3 松本ビル
TEL (541) 5471

素浄瑠璃と視覚的補助

会長 吉川 英史

先般の文化庁の芸術祭に参加したレコードには、映画のための音楽、ミュージカルの音楽、アニメーション(動画)のための音楽があった。純粹に聴くために作られたのではなく、見ながら聴くものとして作られた作品である。いわゆる総合芸術の中の音楽なのである。

審査の結果は、これら三作品全部が受賞しないことになった。落選の原因は他にもあったが、見ながら聴くべきものであるから、音楽だけしか提供しないレコードでは、やはり弱いというのが、重要なポイントであった。もっとも、他に強力なレコードがなかったら、受賞しないこともなかったであろうが…。

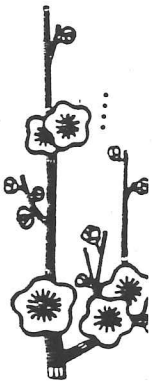
さて、右の論理でいくと、義太夫節という音楽はどういうことになるのであろうか。誰でも知っているように、義太夫節は人形と結びついた音楽として作られたものである。人形を見ながら聴く劇音楽として作られたものである。この総合芸術の中の義太夫節だけを取り出して、目の助けは借りずに耳だけで鑑賞することに、何の問題もないのであろうか。始祖竹本義太夫が、近松門左衛門作の「出世景清」を語り、浄瑠璃に革命が起こり、これ以後の近松義太夫作品を新浄瑠璃と呼ぶのであるが、この革命こそは、浄瑠璃と人形を完全に結合させたことであり、文芸から演劇への変身を完全に成しとげたことである。

しかし、その一面、対話の部分は、誰のコトバ(セリフ)であるかを一々断らないことも多くなったので、人形を見ていないとわかりにくくなってきた。それ以前の古浄瑠璃では、誰々いわくと、コトバの主語を明らかにしている。わかり易いが、演劇的にはくどくて、面白くない。

コトバ以外に、動作の説明の所(地合)でも、古浄瑠璃では主語をはっきりさせる所を、新浄瑠璃(近松の「出世景清」以後)では、省略することが多くなった。人形を見ていれば、それでも充分わかるからである。

ところが、素浄瑠璃の場合は、コトバや動作の主体(主語)がわかりにくくなる。何度も聴いていけば、わかるようになるが、初めての客などにはわかりにくい。素浄瑠璃を専門のようにしている女流義太夫には、このハンディキャップがある。女義の客を増加するためには、何らかの意味で、視覚的補助を考慮することが必要なのではあるまいか。

その方法と手段は必ずしも現在の文楽の三人遣いの人形に限るわけではない。動画・スライド・映画・糸操り・車人形などいろいろ考えられる。しかし、太夫と三味線弾きとしては、視覚的補助なしに聴いてもらえる芸を目標に修業してもらいたい。





新春のごあいさつ

副会長 豊沢仙広

新年おめでとうございます。

昨年の本牧亭公演に若いお客様がたくさん来て下さるようになり、義太夫節発展の仕事が充実してきたのだと喜んでおります。

演舞場岡副社長の有難いお言葉を頂きました。五十五年度は、文部省・文化庁からも義太夫協会によりよき御支援もあることと信じております。

吉川会長の勲三等、秋の受賞は会員一同の喜びで、祝賀会の申し込みに壱千円の会費で一月十一日、学士会館で会を持つことになりました。ロッキード事件にはおよそ縁のない御人格で、金のかかる祝賀会は受けないと申され、この時節にこんな立派な会長を頂いている義太夫協会は、義太夫愛好者の皆様に喜んで頂ける立派な協会になることと存じて、うれしいお正月を迎えさせて頂きました。

正会員は勉強に努力、賛助会員の皆様は御健康に気をつけられて、五十五年をよりよく幸福にお過ごし下さるようにお祈り申し上げます。毎月二十日・二十一日の本牧亭公演、本年もよろしく御後援下さいますようお願い申し上げます。新年の御挨拶にさせて頂きました。

昭和五十五年 初春

吉川会長

叙勲おめでとうございます

邦楽研究の權威、義太夫協会では、法人設立以来ずっと会長をつとめて頂いている吉川英史先生が、昨秋、勲三等瑞宝章を受けられました。祖先祭席上、正会員一同祝辞を述べ、ささやかな記念品をお贈りいたしました。また一月十一日には、先生の教え子の方が中心となり「叙勲を祝って、吉川英史先生の思い出話を聞く会」という、今どき会費千円の大変ユニークな会が開かれました。会場の学士会館には、先生のお孫さんから人間国宝まで、各界の関係者が集まり、先生のお人柄がしのべれます。思い出話は、出生の秘密？から高校時代まで、時にテープ・スライドを交え、黒板を使用する等講義のような雰囲気も、一、終始おだやかでユーモラスなお話に会場はすっかり魅了されました。二度のティー・タイムと福引のオマケまでついた前代未聞の祝賀会は、決してお義理でない何とも心暖まるものでした。

寄 贈

- 河野 国声様 先代津太夫師テープ 五本
- 故猿幸師テープ 二四本
- 新カセットテープ 七二本
- 豊沢 新兆様 コマ 七ヶ

十二月二十日のNHK厚生文化事業団と共催の「心身障害児のための慈善公演」二十一日の師走合同お名残り公演、二日間とも大入満員で熱演させて頂きました。賛助会員の皆様、おいでになれない方は御送金下さったりして、いつもの年よりたくさん御寄附を頂きNHKにも喜んで頂きました。義太夫御支援の賜と、正会員一同厚く々々御礼申し上げる次第でございます。

五十四年は事務所の移転、教室の稽古所、いろいろと苦勞が重なりましたが、役員の努力ですべて落ち着きました。新橋演舞場落成の際には事務所、教室も考えているからと、

昔の因会の専を

話せとのこと

相談役 豊澤猿三郎

新年おめでとう御座います。義太夫因会が社団法人義太夫協会となりまして、本年は十周年を迎えます。協会から昔の因会当時の事を書いて呉れとの依頼でしたが、筆不精の私故お断り致しましたが、最年長の貴方に断わられては困るとのお話に、古い事は存じませんが、私が因会へ入会させて戴きました七十年前、明治四十四年の事をお話し致しますよう。

其の当時は、入会致しますのに、師匠に伴われ、頭取の所へ参り、技芸を勤み、礼儀を守り等々の誓約書を入れ、頭取から内務省へ上申、内務大臣から遊芸家入札を下附され初めて舞台へ出られるのです。蓋札は一等から八等迄あり、一等は朝太夫・松太郎の河師匠だけでした。此の中で、女子部の小清師匠が三等でありましたのは、小清師が如何に偉かったかが判ります。素行さん・小土佐さんは五等であった様に記憶しています。此の階級も、大正四年頃、廃止となりました。今日も続いて居ります。回向院の祖先祭は、明治末は祭の執行後、附近の美術倶楽部の二百畳の大広間に移り、床の間に朝太夫・松太郎の両師がお並びになり、太夫・三味線共に顔付順に並びます。当時、正会員が四百数十

名でありましたので、大半は別室、若手は廊下です。宴は簡単に済ませ、各師匠は弟子全員を連れ、ほうざしやも、或は、ももんじやへ集りますので、両店は満員になりますのが例でした。

そうそう、私が十五・六の頃でしたか、どういいう御用か大阪の師匠方が上京なされ、回向院を参詣され、美術倶楽部へ列席されました。正面に朝太夫師、隣りに東京の播磨太夫、ついで大阪の越路太夫・南部太夫・津太夫・伊達太夫、東京の津賀太夫・港太夫、大阪の古柳太夫・さの太夫・綴太夫の諸師。三味線のの方は、松太郎師の隣りに、東京の勝鳳・喜助・重太郎、大阪の折右衛門の各師匠が並び、裏に壯観でした。因会では毎年祖先祭に

列席した者に依って顔付を制作、新加入を発表、紹介します。併し此の顔付けも大正十二年を最後に廃止となりました。此の顔付、最後の一枚を私、保存して居ります。御希望の方には御目にも掛け、コピーして差し上げます。其の最後の顔付、四百数十名の内、現在元気に舞台を勤めて居りますのは、太夫は朝太夫氏と、三味線は私と猿若君の三人丈けです。朝太夫氏も当分頑張ると言って居られ、私も未だ毎月十五・六回位、劇場やホールで勤めて居ります。猿若君は未だ七十二・三で私より十歳も若いのですから大いに活躍して欲しいものです。私も此の三月で舞台生活七十年と成りますが、未だ々々当分は舞台を降りない決心で御座います。

昭和 55 年

新年会 御案内

今年、いつもと趣向を変えて、はとバス新年会を企画してみました。身近にありながら案外行く機会の少いコースを選びました。たまにはお上り気分になって、貸切りバスでおくつろぎ下さい。会員以外の方でも結構です。お誘い合せ御参加下さいませよう御案内申し上げます。

はとバス・夜の江ノ川コース

日時 昭和五十五年一月二十六日(土) 午後五時四十分出発

集合 川国電上野公園口とはとバスのりば(五時二十分までにお乗り下さい) 会費 一人 五〇〇〇円(食事、飲みもの、入場料等含む)

コース 吉原松葉屋おいらん道中

江戸味覚、前川のうなぎ(酒又はビール付)

上野給本演芸場

(所要約三時間半)

お問合せ、お申し込みは事務局まで(月)金 十一時~四時頃)

協会の動き

昭和54年10月より
昭和55年1月まで

(昭和五十四年)

10月12日 公演部会 於新小松
 10月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭
 11月16日 企画委員会 於新小松
 11月20日 義太夫協会公演会 於本牧亭
 11月21日 故豊沢猿幸師を偲ぶ会 文化庁犬丸長官も見え、盛会であった。会長挨拶「猿幸師は姿も端正、音色の美しさもほれ惚れするようであった。清六師の感化大、女清六という気がした。命をすり減らす程の弟子思いが死を早めたのではと同情申し上げるが、それに対しては若い第二、第三の猿幸となる人が上達すること。猿幸師を失って大きなアナと思つた女義界も若手の力でわずかになくさめられてゐる。猿幸師追慕の気持で義太夫界をよろしく(要旨)」土佐広理
 事挨拶「三十年間の相三味線で、熱川温泉病院にも一緒に入院、二人で舞台に出る時は知らせてという人もどっさりいたのに、残念と

12月16日 忠臣蔵総稽古 於新小松
 12月20日 日本放送協会助成金20万円入金
 12月20日 第九回心身障害児のための慈善公演 共催NHK厚生文化事業団
 (8頁参照) 於本牧亭
 12月21日 昭和54年お名残り公演 前日同様
 仮名手本忠臣蔵を総出演にて演奏。賑かに手前で年おさめ、於本牧亭
 昭和54年度祖先祭、訛経後、懇談会。久しぶりの新入正会員、竹本重光(重之助門下)、竹本越恩(越道門下)の披露を行う。席上、吉川会長の叙勲を祝う。於回向院
 12月28日 仕事おさめ
 (昭和五十五年)
 1月5日 仕事はじめ
 1月18日 会報第20号発行

猿幸師を偲ぶ会から

昨年十一月二十一日、一周忌を迎えた故豊沢猿幸師を偲ぶ会を開催しましたところ、師ゆかりの方、ファンの方、多数がお集り下さいました。当日臨席された師の御長女、白井富美子氏より、心のこもったお礼の手紙を頂きましたので、会員みなさまにお伝えいたします。

※ ※ ※

御寒さの折柄ますます御健勝に御過ごしのこととお慶び申し上げます。
 先日は御多忙のところ協会員の皆様のおかげで「猿幸を偲ぶ会」を催していただきましたこと厚くお礼申し上げます。
 おかげ様で盛会に終り、母もあの世で喜んでゐることと思ひます。本牧亭の楽屋へ、六年ぶりに何の大変なつかしく、よく母のおともで何った時のことが思ひ出され、ここに母がいたらと、ふと寂しい気持ちになりました。でも義太夫協会も若い方が多くいらしたので頼もしく、ますますの発展祈ります。お礼に伺うべきところですが皆様にくれぐれもよろしくお伝え下さいますようお願い致します。寒さに向い皆様の御健康お祈り致します。
 取り急ぎお礼迄
 かしこ

協会事務局様

社団法人設立前夜のこと

竹本 綾太夫

第20号

報々々々々々々々々々々々

1980.1.18

任意団体であった義太夫協会が社団法人に成りましたのは、昭和四十五年六月十六日のことであります。昭和三十二年に義太夫同協会改め義太夫協会となり、故二代目豊沢松太郎会長・故豊竹湊太夫理事長を中心に、各種事業を積極的に実行致しましたが、種々の面で任意団体の限界というものが現われて来ました。そこで責任ある団体としての法人化が考えられたのであります。

もともと湊太夫理事長は法人化を唱えておられました。余りにも遠大過ぎると内外の反対に遭い、手をつけることが出来ませんでした。その論点は、現在弱少団体乍ら曲りなりにも運営しているのだがこれ以上七面倒な機構はかえって動きを鈍くするし似つかわしくない、それと設立基金として約五百万円以上の大金(当時の社団法人は基金三百万円以上その他に二百万円位の準備金・財団法人は基金一千万円以上が必要であった)を集めなければならぬがそれは先ず不可能である、などでありました。不況・就職難・安保護動、文楽は不入りで松竹も手離そうという三十年代のお話であります。その三十九年の総会に於いて、法人化賛成の豊沢仙広師が副会長に選出され一転機が訪れました。

四十年代に入るや、副会長は、斯道の発展・後進の育成などの事業を積極的に押進めるには沢山のお金がいるが、責任のない任意団体にはお金が集らない、国・公共機関の助成金や一般からの寄附金を受けるには法人化は絶対必要と力説されました。二十才代が一人・三十才代が四・五人という後継者難や、松太郎会長・猿之助相談役・猿平理事が亡くなり、湊太夫理事長の病状悪化などが続き、何とかしなければという危機感から、内部の意志統一が成ったのは昭和四十三年頃の事でありました。

先ず何処の所轄の法人になるかとか、定款(会則)はどのように作成したらよいかその他、俄然忙しくなったのは事務局でありました。それよりもっと大変なことは、如何にして五百万円を集めるかという事でした。これは仙廣副会長が一手に引受けて、まず率先して百万円を寄せられ、そして加藤聚楽様・故菊地秋月様・河野国声様・松岡語松様が各五十万円、計二百万円、ついで小田切一鳳様(二十万円)・鈴木一光様・故増田伊年子様(各十万円)始め理事諸師の御連中約五十名様より約百三十万円。一般の方ばかりにお願いしてはいけないと正会員諸師(理事は五万

円)から約百万円を、総計五百三十万円という驚くべきことが実現したのでした。

事務所も今迄のように個人宅ではなくという事で、本牧亭の御好意により一室(正確には一隅)を貸り机も整いました。そして四十四年末、申請先の文化庁より東京都教育局に書類が廻り四十六年春頃には許可されるのではないかという見通しが出来ましたが、そこで大きな問題にぶつかりました。それは誰方に会長になって頂くかという事でした。種々と曲折がありました。吉川英史現会長がお引受け下さったことで解決致しました。今から思うとよくもまあこの斜陽団体の会長を、とお願いしたのですが、「義太夫復興の一助とならば」と、快くお受け下さった時は、暗夜に一灯、いや三灯ともいうべきで、こゝに協会の前途は定まったのでした。

昭和四十五年六月十六日、予想より半年も早く許可(翌年になると法改正により基本金があぐつと引上げられた)があり、七月九日、上野タカラホテル大宴会場にて設立総会、その後記念祝賀パーティが各界の名士多数御集りの上賑やかに催されました。

早いもので、本年夏には社団法人設立十周年を迎えます。内外多くの方々の努力・御支援で今日の姿と成ったのですが、これを契機に、当時の危機感・向上心・一体になった時の猛エネルギーなどを思い起こし、又新たな気持で歩を進めなければなりません。事務局担当者の回想拙文にお目を通されありがとうございました。(55・1・14日)

(投稿)

説経と浄瑠璃と

桑原 須賀夫

第20号

一項流行の言葉を借りると、説経は義太夫のルーツである。学者は唱導文芸とか唱導文芸などとむつかしい名で呼んでゐるが、どちらにしても語りものの系譜の上でもっとも重要な位置を占めるものである。

折口信夫氏は、説経がたんに音曲的音楽的な意味での語り芸ではなくして、舞ひやをとりを伴った、多分にみせる要素のつよい総合芸術ではなかつたかと推論してゐる。

中世から近世初頭にかけて、語りと舞ひとは仲のよい恋人たちのやうにいつもひとつ所にあつた。周知の通り、出雲阿国の歌舞妓をどりの母胎となつた幸若も語り芸のひとつと考へてよいものである。

説経の隆盛をきはめたのが近世初頭であることは、この頃はじめて説経の正本が刊行されてゐる事実や、当時の風俗画や絵巻などによつても察し得ることである。しかし私がとくに興味を覚えるのは、さうした完成期、隆盛期よりはむしろ、操りなぞと結びついて劇場に進出する以前の、云はばゆりかごから成長の時代である。研究者はみな一様に資料の寡薄を託つが、素人の私にとっては却て好都合である。なにより勝手気儘な想像を逞しうする楽しみがあるからである。

とまれ、京大阪なら神社の境内外や市のたつ設帳の地に、あるひは街道の宿場などには、さうを習りながら寺社の縁起をその土地個々の信仰や伝承に溶け込ませながら巧に物語る数多くの語り芸人の姿をみる事が出来た筈である。阿国とその仲間の者たちも、さうしてかはら音でもつたに違ひない。そして、語り手がかはら音の乞食芸人なら、これを喜んで聴く者たちの多くも又最下層の賤民や乞食の類でもつた。説経の主人公の悲境に寄せる彼らの厚い同情と共感は自然であつた。この点、幸若舞ひが主に武家に愛顧せられたのとは向に対照的と云へるであらう。

説経の特色の第二は漂泊性、流動性と云ふことではなからうか。彼ら遊行芸人たちは定住の地をもたぬ一所不住の流浪の民であつた。こちらの邑からあちらの町へと転々として留まることがなかつた。説経が久しく大道芸であつたゆゑんであらう。「道行」もかうしたことと無縁ではあるまい。折口信夫氏は説経を「旅の芸能」と呼んでゐる。「旅の芸能」と云ふと思ひ出されるのが能楽であるが、説経学者室木弥太郎氏は、親阿弥作の「自然居士」のシテが紛れもなく説経を語る遊行僧であることを指摘した上さらにかう云つてゐる。

「ここに登場する説経者自然居士は、人買いの男から娘を救うため、ササラを操り、羯鼓を打ちながら舞を舞う。説法もさること乍ら、さういふ芸能も得意であつたことが分る。」

この見解は折口氏の推論と符合してゐる。それはたゞ味深深い。

江戸時代の風俗画や歌舞伎図巻をみると、彼らがササラのほかに三味線を手にしてゐることに気がつく。本来、説経の主要楽器はササラであつた。それがいつの頃からか三味線を併用するやうになり、やがて三味線の大流行を迎へてササラは厭きられ棄て去られることになつたのではなからうか。流行楽器の三味線とつよく結びついて発達したのが近世浄瑠璃であり、古いササラ説経は次第に衰退してゆく。私見によれば、ササラ説経のはりの中世の終焉であり、ササラの古風な祭乐的な音色は中世の厚い帷のひかれる音だつたのではなかつたか。それはしかし、きはめて現世的快楽的な近世と云ふ時代の尋あけでもあつた訳であるが。

ところで私は頃日、新潮社から古典集成の一巻として「説経集」が刊行されてゐることを人に教へられ、早速収められた六編の作品を通読してみた。「さんせう太夫」と「しんとく丸」は前に一度読んだが残る「かるかや」「をぐり」「あいごの若」「まつら長者」の四編は初読のものである。

現世と来世の二元的世界の自由な交換は能楽に通じるもので、混沌とした不思議な語りには魅力があり、私は一気呵成に読了した。なかでも「をぐり」に心を動かされた。この作品を私は一種の「恋愛譚」として読み、小栗判官の勇猛果敢な行動力に男の全き姿を、判官を慕ふ照手姫の献身には女性の理想像をみる思ひがした。とくに感銘に堪へないのは毒殺され、醜悪さはまる餓鬼の姿となつて蘇

った夫小栗判官に対する照手の款身の美しさであった。「しんとく丸」の乙姫にも、私は感動を禁じ得なかつた。安寿やさよ姫とも変るところはない。私はあの近松の女たちや義太夫の健気な女主人公たちの姿を思はずにはゐられなかつた。

似非恋愛の氾濫する今日、良き一服の清涼劑として一読をお薦めしたい。

さて私は、「をぐり」や「しんとく丸」を美しい恋物語として勝手に読んだ訳であるが「をぐり」の内容の豊饒なことは洵に駭くばかりで、折口氏の「小栗判官論の計画」は我々の前にその多様性を拓いている。

丁度同じ頃、私は岩崎武夫氏のかいた「さんせう太夫考」と云う本にめぐり会った。それはまさに「めぐり会った」としか云いようのないもので、私はこの一冊からいかに多くの示唆を与えられたか計り知れない。語り並に思ひを致す人が一度は読んでおいてよいものと確信している。(平凡社選書の一冊として発刊されてゐる)

岩崎氏はこの本の中で「摂州合邦辻」を例に次のような卓抜な意見を述べている。

「この作品では、天王寺の場の構造(中世の天王寺は貴賤を丐人の集まる聖域であった)と論理——生命の転換と更新の刻——が著しく変質し、信仰的要素を失って、グロテスクな蘇生劇として現われている。俊徳丸が継母の玉手御前の体内にある鳩尾の血を吸って癩病から平癒するという設定は、天王寺という場の論理を踏まえているにしても、もはやそこに呪術信仰的な素朴な肌合いを感じとることは不可能であり、近世の人間臭い、趣味性の勝った爛熟した世界を見るだけである。こ

のことは、中世的な呪術信仰と矛盾が信じられていた聖域としての天王寺の信仰的な面が稀薄化し、大衆の集まる広場としての様相を強く現して来た近世化された天王寺へと変質してきたことを物語っている。

若い女の鮮血によって業病から平癒すると云う趣向は、それ自体いかにも面妖で「グロテスク」ではあるが、その官能性にはえも云はれぬ悪趣味の味はひが横溢してゐて、義太夫でも歌舞伎でも、この場面になると、私は身内の血の熱くなるのを覚える。これは私が「健全な」中世人とは違ひ、すこぶる「不健全な」現代人だからであろうか、それともたんに私の趣味の悪さを明かすことに過ぎないのであるか。

聖域の世俗化に伴う変様の過程は同時に、説経から浄瑠璃への変容の態様でもあった。それにしても、古拙な説経が「グロテスクな蘇生劇」に変貌した事実はおそらく、近世と云ふものの時代精神を暗示するものと云へるであろう。それは現世利益を喜ぶ金中心主義であり、道具立の濫費とあくどいケバケバしさの支配する「人間臭い、趣味性の勝った爛熟した世界」である。

元祿文化とは思ふに、さうした時代の絶頂に大きく咲き誇った徒花ではなからうか。武士が軟弱化し、特権的な御用商人たちが跋扈した元祿の世は、芭蕉、西鶴、近松を生んだ時代であった。西鶴が富裕な町人であり、芭蕉、近松ともに武士を捨てたと云うことは、私には何か象徴的なことに思へてならない。

五四年十一月四日稿

新入会員御紹介 (敬称略)

正 会 員

賛 助 会 員

準 賛 助 会 員

第九回 心身障害児のための
慈善公演
— 決算報告 —
(昭和五十四年十二月二〇日)

おかげさまで左の通りの成果をあげることが出来ました。各方面の御協力、有難うございました。尚、今回もまた、協会相談役の高野俊雄様がプログラム、切符の印刷一切をおひき受け下さいましたことを御報告致します。

＊ ＊ ＊

収入の部

会場募金箱(20・21日)	五七、七八八円
当日入場料	一一、五〇〇円
出演者扱切符代	五四、四〇〇円
協会扱御寄附	四六九、〇〇〇円
△内訳▽	
宮脇雪むら様	一一〇、〇〇〇円
土佐 会様	一〇〇、〇〇〇円
新小松御一同様	六〇、〇〇〇円
小田切一鳳様	三〇、〇〇〇円
吉田幸三郎様	二〇、〇〇〇円
石塚 晃玉様	一〇、〇〇〇円
内野 正幸様	一〇、〇〇〇円
坂本 朝一様	一〇、〇〇〇円
多田 春三様	一〇、〇〇〇円
近松御一同様	一〇、〇〇〇円
妣田 圭子様	一〇、〇〇〇円
藤村 直司様	一〇、〇〇〇円
松尾 武市様	一〇、〇〇〇円

松岡 語松様	一〇、〇〇〇円
菅 邦夫様	五、〇〇〇円
鈴木 一光様	五、〇〇〇円
寺中 作雄様	五、〇〇〇円
中村初波奈様	五、〇〇〇円
渡辺 兼佐様	五、〇〇〇円
和田 博様	五、〇〇〇円
無名 子様	五、〇〇〇円
石川 智様	三、〇〇〇円
小林 新平様	三、〇〇〇円
島 春栄様	三、〇〇〇円
菅原 大常様	三、〇〇〇円
竹本扇太夫様	三、〇〇〇円
高木 秀子様	二、〇〇〇円
鶴沢 重造様	二、〇〇〇円
松喜 久様	二、〇〇〇円
水竹 タカ様	二、〇〇〇円
佐野 文江様	一、〇〇〇円
合計	五九三、六八八円

支出の部

心身障害児の為の寄附金	二五七、七八八円
本牧亭席料他諸掛	八二、五〇〇円
通信費	六六、六三〇円
交 通 費	五、三二〇円
床世話・荷上げ料	三九、〇〇〇円
謝礼・祝儀その他	六九、五〇〇円
総稽古諸経費	一九、四四〇円
諸 雑 費	五三、五一〇円
合計	五九三、六八八円
差引残	〇円

住所(住居表示)変更
正 会 員

計 報

■豊沢宗之助師(正会員) 54年11月12日逝去

銀行口座番号変更

東京都民銀行 日本橋支店

当座 〇一五七七〇四 になりました

編集後記

年度内三回発行の公約が早めり果せてホッとしています。80年代80年代と、マスコミに乗せられる訳ではありませんが、今年六月は、社団法人化して満十年にあたりますので、編集部としても何かまとまった仕事をしたいと思っております。公演部でも十周年記念を考慮中ですのでどうかおたのしみに。本年も、投稿、御意見よろしく願ひ申し上げます。